
Song of snow

しずく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Song of snow

【ノート】

N6901J

【作者名】

しずく

【あらすじ】

病院に入院し続ける男子学生は、夜中に小さい少女と出会う。

歌を歌う少女、その正体は…。

音が、降る。

脳内で、水滴の音が響いて目が覚めた。
視界は闇に包まれている。

微かに香る薬品の匂いに、ここは病院なんだ…と理解した。

当たり前だ、僕は入院している。

入院してから暫く経つというのに、目覚めの瞬間だけはまるで別世界にいるような感覚になる。

闇に慣れてくれば、見えてくるのは白い天井。

眺めているのにも飽きて僕はゆっくりと体を起こした。

この部屋には僕しかない。

別に感染するような病気に掛かっている訳じゃない、あまり人との接触を好まない僕を考慮してか…両親は個室を用意してくれた。

高校に入ってすぐ、ろくに学校も行けずに病院に通い今では学校に出向く事も出来ない。

どうやら生まれた時から体の弱かったらしい僕は、今この年齢で生きているのが不思議だ…と言われている。

原因不明の発作。

それが起きるとまるで刺されているんじゃないか、というくらい
の激痛が心臓を走る。

高校に入って一年の終わりまではその回数が少なかったものの、二年になった今は一週間に一回の確立で頻繁に起こっている。

…苦しいのは、嫌だ。

いつそ楽になれたら…

発作で呼吸を荒げながら目の前が霞む度にそう思うけれど、自分の命を絶つ事は出来ない。

それは、こんな僕を見捨てず育ててくれた両親がそれを望んでいないからだ。

飽きもせずに見舞いに来てくれる。

その途中で発作が起きる度に泣きそうになる母さんの顔が頭から離れない。

けれど、自分の体だからだろうか僕の中で限界が近いのが分かる。

誰にも言わない、言えないけれど…きつと、僕は、もう一度発作が起きたら…。

……止めよう。

僕はその考えを流すように首を緩く左右に振った。

窓の外を見れば、綺麗に輝いた月が空に浮いている。

そこから視線を部屋に掛かっている時計に移動させれば、夜中の3時を回っていた。

すっかり目が覚めてしまった。

そういえば、夢を見ていたような気がする…

けれど今となっては何の夢だったのかさっぱり分からない。

一つ息を着く。

気晴らしに風に当たりたいと思い、ベッドを抜けて窓に足を進めた。

「……………」

ふと、遠くに人が見えた。

ここは2階だ、あの位置は…よく散歩に使用される近くの公園だっ

た。

こんな夜中に、と僕はじつとその人物に目を凝らした。

白を纏うその身長が小さめなのが分かる。

走り回っては立ち止まり地面…いや、あそこは砂場だろうか？

そこで何かをしている。

…遊んでいる、と言った方が正しいのか？

はたから見れば微笑ましい光景に見えなくもないが、時間が時間だ。僕は不思議に思いながらもその子を観察した。

やがて砂場に飽きたのかうろつろとし始めた。

そしてその足は大きい木の下で止まり暫く見上げていたその小さい体がやがて登り始めた時、僕は思わず驚いて窓に手を付いてしまった。

そうしている間にも時々落ちそうになりながら上へ上へと登って行ってしまい今は足しか見えない。

あんな所から落ちたら怪我をしてしまう。

と慌てた僕はとりあえずその事を話そうと、病院の医師かナースを探しに部屋を出た。

廊下をなるべく音を立てないように小走りで一階のナースステーションに向かう。

だが、電気は付いているものの人の気配はなく周りを見回しても薄暗い廊下が伸びているだけだった。

どうしようか…

思った僕の視界にふと扉が見えた。

恐らく、従業員専用の扉なのだろう…ひっそりと存在している。

僕はもう一度周りを見回した。

幾ら焦っているからと言って勝手に抜け出すのは危険だ、病院の従業員に見つかってしまったらきつと両親の耳にも入るだろう。けれどやっぱり放っておけない。

僕はゆっくりそこに近付くと、ギィ…と鉄特有の音を響かせながらその扉を開けた。

「……寒……」

夏が終わり、秋に差し掛かったその気温はパジャマのみの身には肌寒かった。

だからと言って今更病室からセーターを持ってくる気にはなれない。僕はスリッパの仮病院を出て目的の公園へと向かった。

公園の入り口に差し掛かった時、耳に聞こえてきたのは綺麗な歌声だった。

女の子特有の、可愛らしい声。

夜中だと言うのに、辺りに響くその声は全く不快には感じなかった。その声に誘われるように向かったのは、公園の中で堂々と聳えている大きな木の下。

一歩一歩と近付いて上を仰げば太い枝に女の子が座っている。

足をフラフラと揺らしながらこっちは気付いてないのかずっと歌い続けている。

パキツ…

しまった。

上に気を取られて足元の枝を踏んだ瞬間、声を遮断する音が響いてそのまま声が止んだ。

一旦足元を見てから上を見た瞬間、目の前に白いものが降って来て思わず間抜けな声を上げながら無意識に両手を差し出して受け止め

た。

「…い…っ…」

抱き止めたものを庇ったまま地面へ思い切り転んだ。

膝が擦れたのだろう、じんとした痛みの中うつすらと目を開けると腕の中には少女がいた。

年はまだ小学校低学年くらいだろうか。

薄い茶色の髪と瞳、白い長袖のフリルの付いたワンピースを纏った少女は僕の腕の中できよとんと大きい瞳を時折瞬いて僕の方を見つめている。

何故こんな時間にここにいるのか、親はどこにいるのか…聞きたい事はいつぱいあったけれど、とりあえず腕の中から下ろし、少し乱れてしまった髪やワンピースを片手で直した。

少女はその間もじっと僕の様子を伺うように見ている。

「えーと…驚かせてごめんね？…お名前は？」

僕は、なるべく怖がらせないようにと出来る限り優しい口調で問い掛けた。

しゃがんでその少女と同じ視線になる。

「……………こゆき」

小さな口を動かして、呟く声を拾った。

容姿に似合っている可愛い名前だと思った。

こゆき…小雪、と書くのだろうか？

「小雪ちゃん…おうちは？」

「……………」

問い掛けても少女は不思議そうに首を傾げながら見つめてくるだけだった。

せめてうちが分からないと送って行くにもそれが出来ない。

僕が言葉に詰まっていると少女はふい、と視線を逸らして僕を通り

越して何かを見ている。
後ろを振り返るとそこには一つの自販機があった。
少し前のものなのか…中身は缶やペットボトルではなくて紙パックのものだ。
あまりにもそれを見ているので飲みたいのかと思うも、僕はお金を持って来ていない。
ごめん、と言いながら正面を向くと…少女の姿はどこにも見当たらなかった。

…さん…土屋、さん

ハツとして目を開けると、そこは紛れもない病室だった。
闇とは一変してそこは既に明るく、カーテン越しに太陽の光がベッドに掛かる。

傍では担当看護婦さんが僕の顔を覗き込んでいた。

「あら、やっと起きたのね？もう11時よ？」
まだ20代半ばくらいのその人は、僕と目が合うとにっこり笑ってそう言った。

何が何だか分からない僕は、ただ黙っていたけれど慣れた様子で検温を済ませて看護婦さんは部屋を出て行ってしまった。

…11時。

時計を見れば言われた通りの時間だった。

一体どこまでからが夢だったのだろうか？

「……っ」

急に足に痛みを感じて体を覆っている布団を退けた。
すると、パジャマの膝の部分だけが少し汚れている。
途端に夜の出来事がフラッシュバックした。

白いワンピースの髪の長い少女。

「夢じゃ…ない」

口にするとしても経ってもいられず、僕はセーターを羽織ってから病院の外に出た。

太陽の日差しがあるからだろうか、外はとても暖かかった。

公園には家族連れが多く、所々病院の患者がいるのだろう僕と同じくパジャマ姿の人もちらほらと見掛ける。

あちこちに駆け回る小さい子達。

視線で追い掛けても、出会った少女は見当たらなかった。

自販機に近づく。ボタンの一つに指先を触れながら、僕はパジャマの胸ポケットに入れてきた小銭を思い出した。

暫く考えていると後ろから足音が聞こえて来た。

振り返ると小さい男の子が親から預かったのだろうか、小銭をぎゅっと握り締めながら立っている。

「ああ…ごめんね」

僕は飲み物を買わずにその場から離れてその子に譲った。

そして、もう一度公園を見渡すと病院へと戻った。

その日はそれから母親が見舞いに来てくれた。

父親と共稼ぎをしている母親は、週に1日の貴重な休みを僕の見舞いに使ってくれる。

僕が入院するまで母親は仕事をしていなかった。

ずっと専業主婦としてやりくりしていた母親は、家事と仕事との両立に慣れていないのか明らかに疲れが顔に出ていた。

けれど、僕に対してはそんなそぶりを見せずにいつもニコニコと笑顔で接してくれた。

僕は…そんな母親にとっても感謝していた。

同時に、罪悪感も胸の奥に燻っていた。

「……母さん」

「ん、どうしたの？」

「……ありがとう」

母さんの目にどう映ったか分からない。

けれどそれを言った後、母さんは僕を抱き寄せて「いいのよ」と言った。

その腕は弱々しく、微かに震えていた。

それから、面会時間ギリギリまで母さんは僕の近くにいてくれた。

いつもより多く喋ったからだろうか、その夜は早めに眠りに着いた。

夜中。

ふ、と目を開けると病室は月明かりに照らされていた。

辺りは静寂に包まれている。

時計を見ると3時……昨日と、全く一緒の時間だった。

同じようにベッドを降りて窓に向かえば……公園で走り回っている一人の少女が見えた。

ここからだと言男なのか、女なのかすらも分からない。

けれど……僕は何故か昨日の少女だと確信していた。

ここは驚くところなのだろうか？どうしてだろう、と。

ふと脳裏に疑問符を浮かべるも僕の心はやけに冷静だった。

まるで、この事を知っていたかのように。

昨日と同じ時間に目覚めて、窓から少女を見て……それから……

僕は、セーターを上羽織ると静かに部屋を出た。

「……こんばんは、小雪ちゃん」

大きな木の前で見上げながら歌う少女の背後に声を掛ける。
その子は、歌うのを止めると僕の方を振り返った。

僕は少女の前まで歩き、片手を上げると自販機を指差した。

「今日は、買ってあげられるよ」

何も喋らないものの、少女は嬉しそうに目をキラキラさせて僕を見つめた。

その表情が本当に可愛くて、思わず小さく笑ってしまう。

自販機の前まで歩くと後ろからパタパタと少女が着いて来た。

胸ポケットに入れたままのお金を取り出して自販機に入れる。

今まで暗かったボタンがパツと赤く光った。

少女は自分で押したいのか背伸びをする。

僕はその軽い体を抱き上げると落ちないように支えてやる。

迷わず押されるのはいちごみるくのボタンだった。

ストローを挿して手渡してあげると少女は美味しそうに飲んだ。

妹がいたら、きっとこういう感じなのだろうか…

兄弟姉妹がない僕にとって慣れない経験が、ふとそういう思考を生んだ。

「…あ、りがとう…」

小さな手に紙パックを持ちながら、少女は僕を見つめてそう言った。

どう致しまして、と返そうと思つて唇を開くと途端に心臓がズキンと痛み、僕はその場に膝を着いて崩れた。

心臓部分を両手で押さえる。呼吸が、うまく出来ない…。

視界の端には少女がきよとんとした表情でこちらを見ていた。

「……は、あ……っ……」

とうとう来てしまった。

最後の、発作が。

これが最後なんてはつきりとは分からなかったけれど…発作の度に

悲鳴を上げていた心臓は、今こんなにも限界を訴えているのが分かった。

汗が滲んで…知らない間に、涙が溢れて頬を伝った。
ぼたぼたと水滴が地面を濡らす。

ああ、そういえば…

昨日少女に会う前に見ていた夢は、僕がこうして泣いている夢だった。

死に近づく体とは裏腹にそんな事をぼんやりと考えていた。

「おにいちゃん」

少女の声が小さく響く。

僕は、ぼろぼろに涙を流した情けない顔で少女を見つめた。
崩れた体制から見上げる形になる。

「いたいのか…？」

片手にパックを持ち、もう片方の手を僕の手の上に乗せた。

問い掛けられるも心臓の痛みはピークに達して何とも言葉にする事が出来ない。

「いきたいのか…？」

僕の返答がないのが分かると、少女はゆっくりとそう言葉を紡いだ。
朦朧とした意識の中、一体何を言ったのだろうと考えていた。
本当にそう言ったのかは分からない。

痛いのか…？を聞き間違えてしまっただけかもしれない。
けれど…

「…生きたい…死にたく、ない…」

その台詞が僕の中に込み上げ、掠れる声でそう口にし再び涙を流し

た。

脳内で、その水滴の音が響いて…

僕は、目を覚ました。

目を開けると、ただ白い天井が視界を覆った。

部屋の中は明るかった…壁の時計は11時を指している。

静かな部屋には、外から聞こえる人の声が小さく聞こえた。

夢と現実の狭間で…

無意識に片手で胸元を押さえる。

あれだけの痛みを経験したのにも関わらず、心臓はいつも通りに鼓動を刻んでいた。

生きて…いる。

手の平から伝わるその感触に、そう実感する。

知らない間に涙が伝って枕を濡らした。

それからと言うもの、夜中に起きて少女に会うという事が無くなった。

そんな不思議な体験をしてから半年…外の景色がすっかり冬になる

まで、僕は一度も発作を起こさなかった。
今、僕は私服で病院の外にいる。
小さく息を着くと途端に空気を白く染めた。

担当医や看護婦さんに見送られ、僕は今日退院する事になった。
隣には本当に嬉しそうな母さんの笑顔があった。

その顔を見ると僕も嬉しくなった。
僕の荷物を手に母さんが少し先を歩き、その後ろを歩く。

ふいに、パタパタ…と小さい子が走るような音を聞いたような気が
して振り返ると、あの少女が走り去る姿が見えた。

僕は驚いて母さんに先に行つてと伝えてその少女を追い掛けた。
こじんまりした綺麗な庭に辿り着いた。

そこには小さな池と像が建っていた。…少女の姿は見当たらない。

僕は走ってきて少し乱れた呼吸を整えながら公園をゆっくりと歩い
た。

今まで入院していて初めて訪れる場所だった。

あまり人目に付かないものの手入れは行き届いているらしく、池の
中には小さな魚が泳いでいて周りの植物も綺麗に植えられていて雑
草もない。

幾ら探しても見つける事が出来ず諦めて帰ろうとしたその時、ふと
近くにある像を見上げた瞬間…僕は驚きに目を見開いた。

像は、少女だった。

一瞬見間違いかもしれないと思った。

あの少女よりも少し成長したその姿は背も大きくなっていて…けれ
ど同じようにワンピースを着用していた。

片手を天へと伸ばして空を見上げる少女の像。

タイトルは、『歌う少女』

名前なんて書かれている筈なかったけれど、やっぱり僕はどこか確信していた。

この少女が、小雪ちゃんだと。

「……………」

何も言葉が出なかった。

少女が：小雪ちゃんが空を見上げるように、僕はずっと見上げていた。

“いきたいの…?”

半年前に小雪ちゃんに言われた言葉が反芻する。

僕を生かしてくれたのは：彼女なのでは、と。

まだ疑問が募る中、ハラハラを空から降ってきたのは白い雪だった。

「…ありがとう」

そう残して、僕は母さんの所へと戻った。

また会えたら：少女の大好きないちごみるくと一緒に飲みたい。

そう、思いながら。

(後書き)

冬、雪、音楽というテーマで書きたいと思って書いた作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6901j/>

Song of snow

2011年1月16日06時37分発行